



「知識労働」の格言 P・F・ドラッカー

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパート27回目のテーマは、「知識労働」に関するドラッカーの格言。社会生態学者と自称する氏が、いち早く予言した「知識社会」の到来。今回はその特徴とともに、そこでの「知識労働」および「知識労働者」に関する忠言を確認します。

その1:「知識社会」とは

「ネクスト・ソサエティは知識社会である。知識社会とは、第一に、知識は資金より容易に移動するがゆえに、いかなる境界も存在しない社会である。第二に、万人に教育の機会が与えられているがゆえに、上方への移動が自由な社会である。第三に、万人が生産手段としての知識を手に入れ、しかも万人が勝てるわけではないがゆえに、成功と失敗が並存する社会である」。そして「これら三つの特徴のゆえに、知識社会は、組織にとっても一人ひとりの人間にとっても高度に競争的な社会である」。

「ネクスト・ソサエティの一側面にすぎない情報技術が、すでに重大な影響をもたらしつつある。ITのおかげで知識は瞬時に伝えられ、万人の手に渡る」「インターネットが、世界中のユーザーに対し、何を、どこで、いくらで手に入れられるかを教える」。そしてスマートフォンは、泰斗が予想した「高度」な競争を「過度」にまで押し上げました。

その2:「知識労働」とは

そのため社会は、「知識の伝達の容易さと迅速さが、企業、学校、病院、政府機関に対し、たとえ市場と活動はローカルでも、競争力はグローバルであるべきことを要求する」ようになりました。

そして「ポスト資本主義社会は、知識社会であるとともに組織社会である」「専門化した知識は、それ単独では何も生み出さない。仕事に使われて、はじめて生産的な存在となる。ここにこそ知識社会が組織社会になる原因がある。組織の機能は、共有する目的のもとに、専門家した知識を統合することにある。知識労働者が成果をあげるうえで必要とする継続性をもたらしてくれるものは組織だけである」。以上のように「知識労働」とは、共通の目的に向け「知識」を「共有」し、それを「統合」する組織的な働きのこと。それは「所属」ではなく、組織への「参加」意識から生まれるものです。

📖 出典（上田惇生訳、ダイヤモンド社）

その1:『ネクスト・ソサエティ』

その2:『ポスト資本主義社会』『未来への決断』

その3:『断絶の時代』『明日を支配するもの』

その3:「知識労働者」とは

「知識労働者とは、高度の教育と知識をもつ一部の人たちを指すにとどまっていた。だがこれからは、コンピュータ技術者、ソフトウェア設計者、製造テクノロジストなど、膨大な数のテクノロジストが必要となる。その人々は知識労働者でありながら体を使う。頭よりも、むしろ手を使う時間の方が長い」またさらに重要な指摘は、「知識が技能をなくすことはない。逆に知識は技能の基盤となりつつある。高度の技能を身につけるには、ますます多くの知識が必要となっている。しかも、知識は技能の基盤として使うとき、はじめて生産的となる」。

そしてその後、さらに進歩した人工知能やロボットの存在を考えると、意を強くするのは、我が同胞がもつ特性。それらにニックネームをつけ、仲間として扱い、共に「頭と手」を使って生産性というゴールなき「道」を進む稀有な民族です。

しかしそれを生かすも殺すも、「マネジメント」次第。またそこで強力な「コントロール」を望まない以上、一般教養としての「マネジメント」を全員が学び、それぞれの「強み」に沿って「リーダーシップ」を発揮し合うしかありません。

その要となる皆さんミドルに必須なのは、「コミュニケーション」能力。因みに泰斗がよく引用したのは、下記ソクラテスの箴言です。

「大工と話すときは、大工の言葉を使え」

2022年8月8日 実空